

## 「丹頂が来る民宿」

タンチョウ (丹頂鶴) は、その大きさ、優雅な動き、羽毛のつや、どれをとっても、日本を代表するにふさわしい美しい野鳥です。江戸時代から、浮世絵や日本画の題材としても、好んで描かれてきました。この鳥を見るために、わざわざ道東 (東北海道) を旅行する方も多いと聞きます。確かにあの鶴を一度見れば、その気品に満ちた姿に誰もが魅了されてしまうと思います。

しかしタンチョウは、いつでも誰でも観察できるシジュウカラのような野鳥ではありません。一番重要なのは、餌の多い水辺があることです。特に湿地帯を好みます。私は運よく、道東を旅行するたびに、タンチョウを観察しています。それも民宿の窓からです。

その民宿は「野付半島」の付け根にあります。野付半島 (のつけはんとう) といっても、地理に詳しい方でなければ、「ナニ・・・それ？」(田中邦衛風に言う)と思われるでしょう。野付半島は、知床半島と根室半島の間にある半島です。



「野付半島の位置」 知床半島と根室半島の上に突き出しています。国後島と至近距離にあります。一番近いのは中標津空港。釧路からは根釧台地を横切って、約 100km の道のりです。

地形図で見ると野付半島は、非常に細長い独特の形状をしています。火山の噴火や陸地の隆起でできた半島ではなく、海流によって砂が積もってできた「砂嘴（さし）」です。付け根（標津町）から先端（別海町）までの長さは30km近くもあり、砂嘴としては日本最大級です。



### 「野付半島全体図と部分地形図」

野付半島は長さこそ30km近くもある「堂々たる」半島なのに、幅はちょっとしかありません。一番狭い場所ではたった100メートルです。道（道道950号線）が走っていますが、よそ見をしていたら海に落ちこちそうです。道の上の記号「・4」は標高点（石標なし）で、海拔4メートルを意味します。地図の上（北側）が野付水道（*пр. Измены*）、下（南側）が野付湾です。家屋の記号がありますが、ほとんどは浜小屋（漁具倉庫や作業小屋）で、住宅は数えるほどしかありません。一番近い街は標津町。かつては標津線という鉄道の終着駅がありました。

私は道東を旅行すると、必ずこの野付半島を訪れます。荒涼たる風景の美しさや、動植物の多様さもありますが、すばらしい民宿に泊まることも目的の一つなのです。その民宿は、野付半島の付け根近くにある、その名もズバリの「民宿のつけ」です。



「民宿のつけ」 この半島で唯一の宿泊施設です。四條さんご夫妻が切り盛りしています。部屋からの風景の良さと料理がすばらしい、「北の宿」と呼ぶのにふさわしい民宿です。(水彩画)



「民宿のつけの素晴らしい夕食」 北海シマエビ、魚の煮もの、刺身、るいべ、酢の物、つぶ貝和え、それに大きなカニが丸ごと一杯。下段中央は、珍しい「ハマナスの実の砂糖煮」です。この食事がついて、1泊2食で4500円。ちょっとあり得ませんよね？



### 「民宿のつけの眺望」

2階客室からの眺めです。まるで尾瀬の山小屋に泊まっているようですが、ここは自動車で来られます。目の前の湿原から、民宿の庭までタンチョウがやってきます。

私は宿の部屋に落ち着くと、すぐに仕事に必要なもの（コンピュータ、携帯電話、モデム、水彩画の道具、ポテトチップなど）を広げて、オフィスを作る、悪いクセがあります。



「なつかしの欽ちゃんステッカー」

この宿に落ち着くと、まるで尾瀬の山小屋にいるような気分になります。目の前は大湿原、夜は満天の星空、対岸には国後島の灯台の明りも見えます。

朝、「コウッ！コウッ！」という甲高い動物の音が、すぐ近くで聞こえて目が覚めました。窓を開けてみると、驚いたことに二羽のタンチョウが庭まで来ています。どうやらつがいのようです。互いに羽を広げて、ディスプレイ（求愛ダンス）を繰り広げています。私が最初に見たのは6月で、タンチョウの子育ての時期にはちょっと遅かったのですが、きっと「愚かな探訪者」の為に、わざわざダンスショー見せてくれたのでしょう。

民宿の人に聞いたら、タンチョウはよくやって来るという話でした。「もしや、飼ってるんですか？」と聞いたら「そうではありません。」と言われました。その後も何度もこの宿に泊まっていますが、何度もタンチョウの観察をしています。「日本野鳥の会推薦の宿」にしてもいいような気がします。



「湿原から民宿の庭に出てきたタンチョウ」 美しく気品に満ちた姿です。



「求愛ダンス」 互いに羽を広げて飛び跳ねながら、鳴き交わします。(民宿の窓から撮影)

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)